

ガルシアへの手紙

『ガルシアへの手紙』

あなたはガルシアへ手紙を届けられるだろうか？

ローワンになれるだろうか？

(ガルシアとは、かつてアメリカとスペインが、キューバをめぐる戦争をした時にキューバにいた反スペインのリーダーである。)

アメリカは、そのどこにいるかもわからないリーダーに、大統領からの手紙を届ける必要があり、その困難な要求に見事に応えたのがローワンという将校である。大統領はローワンにガルシアへの手紙を手渡したが、そのときローワンは、その手紙を黙って受け取り、「ガルシアはどこにいるのですか」と聞かなかったということである。

このような無理難題をもし部下に頼んだら、多くの部下はいい顔をせず、「どうやって」「何の為に」「なぜ私が」「急ぐことですか」などと質問し、さらには「“ガルシア”というような男はいません」というような報告するであろう。

こうした自主的行動力のない、道徳心のかけるもない、意志力の失せている、そして自ら進んで気持ちよく頼まれごとを引き受けない、などの生き方をほとんどの人がするために、いつまでたっても、本当の意味での「理想の福祉社会」が実現できないのだ。

自分自身のためにだつてろくに行動しない人たちが、果たしてみんなのためになることをするものだろうか。私が心をひきつけられる人とは、上司がいようと、上司がいまいと、自分の仕事をきちんとする人である。そして、文明とはそんな人を求めて探し続ける道程なのである。

「ガルシアに手紙を届けられる」人間の願いは、何であろうと聞き入れられる。

世界中が、このような人間を、必死に呼び求め、必要としているのだ。

著者のエルバート・ハーバードは、この英雄談から、いかにローワンのような人物がこの社会で求められているかを短い物語として書き上げた。

今、時代は「変化」を求めている。その掴みどころのない「変化」の対象が「ガルシア」なのである。そしてその「ガルシア」は仕事の中、社会の中、国家の中、人間関係の中、さらには家庭の中から出てくる。

そしてそれを恐れず、勇気をもって挑む人、それが現代のローワンなのである。

この『ガルシアへの手紙』を何度も読み返し、自らの人生を実り多きものとし、さらには、社会の求める、必要とする人間となるにはどう生きていくかを、いつも自らに問うて、生きていきたいと思う。

～エルバート・ハーバード著『ガルシアへの手紙』(まえがき・本文より)～